

立祭であつた。夏の暑い日盛りではあるし、餓えてはゐる、渴いてはゐる。長の旅路で嫌といふ程疲れきつてゐる所へ生死に係はるやうな災難で、恐怖心が身體中へ食ひ込んで、五體は縮み上つてしまつてゐる。だから丸で死んだやうな氣で北アラメダ街に倒れてゐた。

(三)

丁度其所へ通り掛つたのが、一人の日本人、氣の毒がつていろ／＼な事を聞いて呉れる。差しあたつて如何することも出来ないで、日本人のボーデングハウスがあれば、それへ一ト先づ落ち附いて、兎も角もしやう、と、其譯を話すと、其の人は親切に介抱をして呉れながら、此の街を左に切れて、パンニング

といふ町の中程に一軒のボーデングハウスがある。主人は自分の知己の男だから、此の名刺を持つて行つて、能く頼んだら、眞逆に知らぬ顔もしては居まい。といふことである。

砂道を這ふやうにして其のボーデングハウスへ行つた。主人は快よく自分の宿泊を許して呉れ、いろ／＼此の身のあはれむべき境遇を慰めて呉れて、マア色々休んだが好からうといふ。

直ぐに裏手を廻ると、大きな臺所があつて、庭が中々広い。一面目の覺めるやうな柴生がベツバー樹の蔭に廣がつて、垣根にからまる蔓草の黄や緑や赤やを交せて、まるでターキッシュラグを織り出したやうである。

私はグツタリと柴生に身を横たへ、涼しい風を食るやうに、疲れ切つた手足

を踏みのばした。其所で始めて人間らしい呼吸をしたのであつた。

(四)

有らゆる困難に馴れた身體も、やれ嬉しやと安心した故か、そよ風が總身の汗膏を吹き流すと、幾日かの疲勞が一時に出て来る、そして張りつめた氣が急に緩んで来る。

どうしても此れが自分の身體とは思へない程だるくなつてしまつて、うとくと眠るともなく眠つてしまふ。斯ういふ時に身體の筋骨をゆるまして意氣地なく眠り落ちてしまふのは、まだく身體の鍛練が足りないので、氣を締め、心を張つて急にヘコタレないやうな覺悟が大事なのに、そんな事など考へたりす

る勇氣も何も出ればこそ、コクリくと眠つて了つて、まるで骨が抜けたやうになつた。

お伯父さん、く、と何處かで呼ぶ聲がした。私を呼ぶのかしらと、不圖目を開いて見ると、お伯父さん此んな所に眠てゐると風邪を引くよ。と肩へ手を掛けて揺り起してゐる。

見ると、十二三ばかりの日本人の小娘である。白色のショートスカートの下から、眞白の肉の透いて見える黒のスタッキング、編み上げの靴が半分ばかり青々した柴生に掩はれてゐる。風の吹く毎にスカートの端が揺いてゐる。お伯父さん、風邪を引くからお起きな、ね、お伯父さん、アラあの眠むさうな顔、マア、呑氣ねえ、お伯父さんは、…………。と笑ふ聲が耳の中へ踊り込むやうに聞える。

私は其の時思はず起き上つた。ハイ、有り難う、つい、うとくしまし
 た、やれ、起きまじやう、と云つて頭を上げると、麥葉の縁の反つた帽子
 を阿彌陀に冠るといふ風に冠つて、眞黒の艶々した髪が波を打つやうに垂
 れてゐる。薔薇色の頬と、涼しい黒眼勝な眼に溶けるやうな笑ひを見せ、兩方
 の手に一ツづゝ大きな眞赤な桃の實を持つてゐた。
 伯父さん、御目覺に此れを呈げましょう、ね、だから早く起きて、家の中でお
 寝なさい。とその右の手に持つた殊に大きな桃を、一度手毬のやうに空で突い
 て、それを私の鼻の先に差し出した。
 ヤ、此れは有難う。と私は子供の様に他愛なく笑つて、貰つた桃に突然食いつ
 いた。

喉が乾き切つてゐる所へ、旨い漿の滴るのを一口、二三口頬張つた時の美味
 いこと、話に聞いた神酒の味でも斯んなに美味いものではあるまいと思つた。
 少女は私が美味さうにして食つてゐるのを見て、嬉しさうに笑つた。伯父さん、
 桃好きね、旨しいければ、これも上げやう。と、も一つのを差出した。イヤ、
 イヤ、もう此れで伯父は澤山、それはお前さん食べて下さい、ヤ、お蔭様で、
 元氣が吹き返して來ました。ア、有難い、私は此れでも十年此の米國に居るの
 だが、今日のやうな美味い御馳走をして貰つたことはない、此れで私も蘇生り
 ました。
 と、くどくど禮を云つたが、娘は愛度氣ない笑を残して流行歌を歌つて飛ぶや
 うに何處かへ行つてしまつた。

(五)

私は桃を食つてしまつた。
 何んだか、斯う身體中に元氣が恢復して來た。今迄の疲勞は、すつかり抜けたやうな氣になつた。そして今迄の氣苦勞も、すつかり忘れてしまつて、生れ變つたのぢやないかと、思ふやうに精々して來た。
 全く桃のお蔭で、少女の賜によつて私の精神も體力も明瞭して來たのであるから、手に残つた桃の種子を大事に仕舞つて置いて、永く此の少女の優しい恩義の紀念にしようと思ひ、紙に包んでポケットに入れたが、不圖桃栗三年といふことを思ひ出したから、試みに此の桃の種子を植へて見やうと起き上つた。

(六)

蔓草のからまつた垣根へ其種子を埋めて、上から土をかけた。
 生え出すものか、生え出さぬものか、それは分らぬが、兎も角斯うして置う、萬一此の種子が生え出るやうであつたら、自分の前途の運命は幸福である。また生え出ぬやうだつたら、もう自分の將來は絶望だ、此れが自己の運勢の吉凶を占ふ一つの辻占だ、と云ふやうなことを考へたのであつた。
 其日は一日此のホテルの厄介になつて、すや／＼眠つて仕舞つた。翌日から非常な元氣で、主人が親切に貸して呉れた幾金かを小遣にして、必死となつて働き始めた。

私が此のホテルの厄介になつて以來の働きの目覺ましいことゝ云つたらそれは人目を驚かした。凡ての日本人労働者が危険だの、困難だの、と云つて避ける仕事へ向つて、ドシ／＼進んで行つた。だから給金も割合によし、正直に忠實に必死となつて骨身を惜しまず働くことだから、備主の氣受けもよく、諸所から私を名ざして備ひに来る。で、愈々忠實に働く。随つて金も取れ、大分貯金も出来て來るといふ鹽梅だ。半年たゝぬ中で三百弗位出来た。

此所で一寸と云はねばならぬのは例の桃の種子で、それが旨く生えたのだ。始めは二葉の小さなものだったが、一ト雨／＼にぐん／＼大きくなつて、私が三百弗の貯金の出来た時は、もう餘程大きくなつてゐた。

その後私は米國諸州を五年間労働して歩いた。労働といふ労働の有らゆる種類

をや、有らゆる困難を経た。此の困難に對しての報酬としての金高は、餘り多額ではなかつたけれども、正道に働いて得た賃金として私程成功したものはなかつた。

華盛頓市から眞すぐに七年目でローサンゼルスに歸つて來ると、驚いたのは日の出旅館で、嘗つて私の世話になつた主人は葎園の事業に手を出して、すっかり失敗して了つた。日の出屋旅館は賣物に出でゐる。其所へ私が歸つて來たら、直ぐにその日の出屋を引受けて、主人には別に雜貨店を開業させた。私はホテル事業を經營する積りで、此の日の出屋の他に日本人旅館の四五軒を他に持つてゐる。

此の話の終りに是非とも附け加へて、私の成功の歴史を飾らねばならぬものが



ある。自慢をする程の成功談でないからして、責めて其所に少しの花を飾らねばならぬ、といふのは例の桃の一件だ。私が七年振りに歸つて見ると、其の桃は花盛りだ。そして嘗つて私に桃の實を恵んで呉れた少女は二十位の別嬪になつて、まだ何處へも嫁入らずにゐた。

私は、其の時はもう三十六七であつた。少し女房にしては若過ぎたけれども、似合はしい縁だと云ふので、其の女が私の妻となり、兩人でホテル事業の經營に力を盡してゐる。今の妻は即ちそれである。

そして今此の皿に盛つて出してある此の桃の實は即ち其の桃の木に實つたものである。で、此の日の出旅館の館章に、桃の實を附けてある譯であるが、此の歴史の真相を知らぬ人は、日の出旅館の館章だから櫻の方が好からうなど



といふ。併し此所では如何しても桃でなくては納まらぬ所である。此れが私の小成功の歴史の概略で、私丈では終生忘れることの出来ぬ事實だ。

斯う云つて日の出屋主人は莞爾として笑つた。自分は桃の實を賞玩しつゝ、主人の家庭の幸福を祝した。そして自分も紀念の爲めに其の桃の種子を一つ今でも持つてゐる。

在米同胞の労働生活

米國に於ける日本人の労働の種類と云つても、それは夥しい程種類がある。南はテキサスの曠野に、大陸の遺利を拾はうと、米作に心掛けてゐるものもあるし、北はアラスカの潮風に曝されて、鮭取りをやつたり、罐詰製造會社に、鮭の頭切りや、腸出しやなど、生臭い鹽辛い生活をしてゐるものもあり、落機山頭は、ラックスプリングの炭鑛に眞つ黒になつて、地獄の鬼の様な生活をしてゐるものもある。ユダーや、ワイオミングや、コロラドやの、大農園に、シユガービーツ、ポテト、などの農事に汗水を流してゐるものもあり、チバダや、キヤリホルニヤや、北部一帯の鐵道事業に働いてゐるものもあり、加州の金鑛

で金掘りをするもの、大森林の中で危険極まるチャップウッドをするかと思へば、翌日は南加州の濱邊で漁師になるものもあり、又は鹽焼きなどを始めてゐるものもある。一體にロツキー以西の諸州何れも、農園が盛んだから、大根畑は云はずもあれ、フレズノ市を中心として、葡萄酒、ローサンゼルス市を中心として、オレンヂ園、梅園、牧場は云ふも更なり、有りとも有らゆる、山林田野の荒仕事は、日本人の労働者の多数を以て、その需用を充たしてゐる。都會の生活になると、ガラリと様子が違つて、所謂、家庭労働になつてゐる。家庭労働の中で、先づ、給料の好いのが、富豪のヴァレット（主にクラブマンと云つて俱樂部生活をしてゐる紳士、大概、パチアラライフを送つてゐる紳士の扨從である。）其れから、もう少し奇抜になると、女優のヴァレットなど、來

ると、大分趣きが異つて、コーセットを締めてやつたり、スタッキングを穿か
せてやつたり、何うかすれば、婦曳の周旋をせんければならん事もある。これ
は日本の所謂「男衆」と似て非なるもので、男優は殊に日本人を喜んで使ふ。
が、間々女優の中にも自分に秘密などを持つてゐるなど云ふ様なのに、特に日
本人を使つてゐる。

普通以上の、家庭には、バートル。中流では、ウエーター。上中共にクック。
ハウスウオーク。は元よりのこと、下つて、中以下で小人数の、小奇麗に暮ら
してゐる小官員や、會社員や、新聞記者の三流どころ、役者の下廻り、中には、
電車のコンダクター、巡的の一寸家計の裕なの、などはスクールボーイを使つ
てゐる。ホテルや、クラブになると、クック、ウエーターの他に、ベルボーイ

と云つて、金卸のジャケットで、出入りの扉をアツテンドする役目があり、其れ
から、園丁、コーチマン。(馬丁)オートモビールのドライバアー、(馭者)大分
下つて、汚い働きでは、素人下宿屋のチャンバアーウオーク。貸長家のポータ
ー。犬の番人。子供の守り。其の日々の費用稼ぎで、金額の上るのは、窓拭
き専門、劇場の後掃除、汽車の給仕及び掃除、機械工場の油さし、すつと奇麗
な所へ行くと、デバアトメントストアのセールスマン、これは大學卒業生の賣
れ残りや、ビジネスカレージの卒業生などが、一と手に引受けてゐる。
其れから日本人の、日本人社會の中で、また特殊の職業がある。即ち、日本字
新聞の新聞記者、活字職工、この職工が何れの社も、記者先生よりは月給が多
い位で、大威張りに威張つてゐる。今一とつ、殊に目立つて見えるのは、通辯

業で凡べて日本人間に起る訴訟事件の中間に入つて法廷で、口を聞くお役目だ。自分では辯護士の積りだが、世間では通辯と云つてゐる。この職業に従事するもので堂々と看板をかけてゐるのが、桑港には四五人もあらうか。就中、最も収入の多いのが、口入業、其他料理屋だの、雜貨品店など、其れ等は云ふも管なり。厭ふべきは醜業などを營んで、外國にまで赤恥を曝らしてゐるのも多いのは、此所に喋々の必要もあるまい。其所で此れ等の職業に就て特殊のものを、今少し詳しく分拆して、青年子弟の参考に供して見やう。

其の中で、青年學生に最も愉快なのは、ガーデナーであらう。太平洋沿岸の地には、學生は主にスクールボーイをする事の様極つてゐるが、東部に行くと、

スクールボーイと云ふ働き口はない。スクールボーイと云ふ言葉の意味さへも分らぬ位で、安い月給で臺所仕事や、拭き掃除までさせて僅の時間に學校へ通はせる様な——一舉兩得の様だが、働くもの、身になると随分辛い仕事を、黙つて仕たり爲せたりする様な風習は皆無だ。その代り東部では、働きは容易でも、働きは働きとして、一人前の給料を呉れるから、好いジョブに打突かると、遊んでゐて勉強が出来る様な事がないでもないが、先づ其様のは極めて少ない。ガーデナーは即ち割りがよくつて男らしくて、風流で、意氣で、健康にもよし、特殊の知識も得られるし、中々、愉快なものだ。其れに大きなガーデンを邸宅の周圍に構へて、人を入れて、種々の草花を絶やさぬと云ふ程の家庭は、先づ中等以上だから、大きいのは土地の舊家もあり、出來星のミリオニヤ

もあり、何しろ基礎の堅い、家庭の中に働くのだから、其れ相應の餘徳が無きにしもあらずだ。朝露の含まれた藍薇の一と枝を切つて、寐衣姿のお嬢様に差上げて片鷹の笑みを、黒い頭の上へ寐白粉の香と共に浴びせかけられた上に、サンキユー、ベリマツチか何かのお世辭に添へて札の一枚も頂戴して、非常に嬉しがつて吹聴して歩く青年も、間々見受けた事である。

この庭園の働きは、多く夏場の時期ばかりで、學生ならば丁度暑中休暇一杯の仕事だ。朝は、五時半か六時頃に起きる。何うかすると、厩小屋の掃除がガナーの仕事に加入されてゐる事があるからして、むつくり起きると直ぐに、馬を引出して、水をかい、すつかり馬にブラシをかけて足を洗つてやり、其れから厩の掃除を奇麗にして、へーを布き代へる。或る男で、斯う云つて溢して

めた男があつた。

厩の掃除を爲るのに困るのは、馬糞を外へ投げ出す爲の切窓が、厩の中に切つてある。其れが米國人は御存じの背が高いから、切窓が高く切つてある。日本人は五尺二三寸の倭小な身體で、腕の力を頼りに一生懸命汚物を、シヤブルにうんとこさと掬つて、切窓から外へ投げ出すのだが、窓は頭の上に切つてある。投げるはづみに汚物は逆戻り、頭から馬糞の雨を引冠ること屢々で、これが何より辛いと、泣言を言つてゐたのは滑稽である。

厩屋の掃除が済むと、オートモビルなり、キヤレーヂなりを、ホースの水で洗つておく。其れから庭一帯の青芝に水をかける。(米國の庭園は凡べて青芝を持つて掩はれてゐる、花園はそのある部分に區劃して、煉瓦なり人造石なりで、

其れ其れ趣向を凝らして作られてある。(花園の花の手入れを、其れ其れ爲る。一本でも雑草の影を残していてもあつたら直ぐにお目玉頂戴である。一と鉢數百弗もしやうと云ふ植木鉢が、何う云ふ譯かまればかゝつてくるのに氣が氣でなく、遂に病氣と云つて暇を取つたなど云ふ話もある。何しろ命のある草花を相手の仕事だから、容易いやうでも心配は一通りでない。水を一とつ掛けるにも、ホースの先きに當てる指加減で、水は霧の様に細かくも撒けるし、夕立の様に荒くも撒ける。植物その物によつて、手加減水加減があるのは、何の仕事も苦勞は同じことだ。米國の婦人は常識が發達してゐるから、凡べて斯う云ふ園藝の趣味にも富んでをり、植物培養の知識などは、書物の上だけでいゝも相當の知識を備へてゐるので、随分驚くやうな小言を云ふ事がある。だからこれも全で

無經驗では出來ない仕事である。晝は、青芝を芝刈り機械で刈るとか、畑のラヂツシユやレタスや何かを、ランチのサラダにする爲に、臺所の方に廻すとか、夕方は矢張り朝同様な事で先づ一日は無事に終る。こんな事で一月に二三十弗の報酬を呉れる。無論ルームとボードとは彼方持ちで、其れに時間が勝手に取られるから、緑陰にハンモックなどを吊つて、其の家のライブラリーから勝手に好きな本を引摺り出し、仰向けになつて音讀をするなどは、一寸洒落れてゐる。其れに花と婦人とは關係の深いものだから、始終其家庭の夫人とか令嬢とか、其れ等の友達とか云ふものと交渉があつて、室外の働きとしては、割合に家庭の内部とも關係があり、可成趣味のある生活

が出来るのである。

在米の日本青年

一時日本青年間に渡米熱が非常に盛んであつた事がある。其の爲に渡米案内と云ふ様な出版物が大分賣れ行きが好かつた様に見受けられた。今日でも矢張りこの渡米熱と云ふものが、全く日本青年の頭腦から取り去られは仕ないであらう。で、教育家もこの邊の事に就ては種々の意見を有してゐる事であらう。或人は青年の渡米を絶対に否定してゐる様である。又或る方面では頻りと渡米を奨励して、寧ろ煽動に近くはないかと思ふ様な態度を取つてゐるものも有る様である。

青年の渡米の可否と云ふ事は、今一概に其の是非を判定して、直ちにこれを否



定し、或は是認すると云ふ事は如何なるものであらうか。自分は自分丈の考へでは、青年渡米の是非は現今の在米日本青年の現況を、極めて詳細に知る事によつて、この問題が自から解決され得るではなからうかと思ふ。

自家の青年渡米に就ての議論は兎に角として、我が同胞青年の米國に生活しつつあるものが、如何に行動してゐるか云ふ事を此所に記して見よう。

無論、海外にあるものに、老年者は何處の地でも少ないであらうが、米國でも矢張り其の通りで、至る所日本人と云へば多くは十七八歳から、二十代至乃三十五六と云つた年輩の、青年から壯年へかけて、男ならば今を勉強の仕盛り、或は働き盛りと云つた年齢を以つて、その大部分を占めてゐる。其の内でも青年の中には、學生を十の七八、壯年の内でも、矢張り學生上り、と云つた様な



調子合の人が、先づ大部分で、根からの農夫町人と云ふのは先づ少數と云つてよい。で、是れ等在米の同胞を一團とすると、これを青年國或は學生國と云つても宜い様な趣きがある。

△渡米當初の一年間

米國で最も日本人の多いのは、無論桑港で、次いでは同じく加州のローサンゼルス、北へ飛んでワシントン州のシヤトル、東へすと飛んで、紐育、中部ではシカゴ、先づ此所等が最も日本人の多ひ所だ。従つて青年の數も多いのである。斯う云ふ風に、米國は五十餘州、東西南北の所々に散在してゐる事であるからして、其の生活法も自から異つてゐるのであるが、一般に我が同胞學生の

生活は激烈な労働を避けて、其の賃銀は少なくとも、時間を十分に得られる様な傾きの労働を撰ぶ様な工合になつてゐて、且つ働き且學ぶと云ふのが普通の様であるが、中には、一期間を激烈に働いて、高い給料を一時に取り、其れを學資として、全く労働と離れて學問三昧になるものもある。即ち、この方は労働は労働、學問は學問と區劃を立てた遣り口であるが、同じ學問の仕方でも、學課の難易に由つて其の方法を異にする必要があるのである。先づ、學生普通の労働は、例の「學僕」と云ふので是れは誰しも一度は試ねばならぬ一とつの階段かの様になつてゐる。渡米當初の一年間は是非この學僕を試みるのが米國を呑み込むと云ふ事に就て、最も早く其の概念をキヤツチする良法である。米國人の家庭へ入つて其の朝夕を見、そして傍ら語學を知らず識

らすの間に習得して行くのであるから、青年學生には先づ相應しい働きである。學僕が如何なる労働を、其の家庭で爲すかと云ふ事は、大略人の既に知つてゐる事であるからして、是所には其れを繰り返さぬのであるが、青年の多望なる前途を誤るのも、この學僕時代の一年間にあるので、この期間は最も學生に取つて注意を要する時である。この學僕と云ふ仕事は、仕事としては極く容易な事であるけれど、米國の規則立つた家庭の中でも、最も規則立ち、且つ口喧ましくされてゐる炊事の手傳ひをするので、其の家の主婦なり、娘なり、或は下女なりと云ふ、婦人を相手の仕事で、今迄はお坊つちやん育ちの我儘物が、太平洋を跨いで亞米利加の地に着く翌日から、直ぐに、おさんと早變りをして、頸に掛けたエプロンの淺間し

い姿となり、珈琲を拵へるの、玉子を焼くの、肉をステーキするのと、朝は五時六時から、叩き起され、門口も掃かう、火も焚き付けよう、ことに由ると、便所の掃除洗濯までも云ひ付かると云ふ様な、慘憺極る仕事を、毎日繰り返すのであるから、とても其の辛抱が續くべき筈のものではない。其れに、仕事に済めば、直ぐ學校に飛び出して、日本で中學を終れた位のもので、小學校の三年四年の、いろはから初める事であるから、自づと學校の方にも飽きがかかる。と云ふ所から、同じ日本人同志、教會なり、學生俱樂部なり、或は雇人口入業と云つた様な、同國人の集会所へ足を踏み出す様になつてくる。丁度嫌氣のさした不愉快の矢先へ、いろく金の儲けの話や、遊戯の話や、例へば誰々はこの夏場をアラスカの鮭取りに行くとか、又は誰某はこの間支那街の

賭博場で一弗の資本で、百弗を勝つたとか五十仙の馬鹿票を買つて八百弗當つたとか、或は、フランスの葡萄園に乗り込まうとか、ローサンゼルスのアレンヂ園へ行かうとか、然うでなければ、何時まで亞米利加へ来て太平洋沿岸へ根が生へても仕方がなし、ロッキーマウンテンを乗り切り、ミスシッピを渡つて、紐育のブロッリンの橋の上で再會を約さうとか、この頃は、テキサスの米作が大當りと云ふから、農業者になつて見ようか、一層思ひ切り、メキシコへでも飛んで、製糖會社でも起そうとか、或は既に日本では中學を卒へてゐるものが小學校もつまらぬ。同じ學校生活をするなら、ハインスクールが氣が利いて好い、大學にだつて誰某は無試験で入つて、ものゝ二年を経たぬうちに、バチラーのデプロマを握つたとか、今度何々座には東部で有名な女役者が来て、キャミールを演

るさうだから、是非見物に行かうとか、そんな物は面白くないから、何々ホールでやる拳闘の勝負を見に行かうとか、其れよりか何々街の横丁にある、尻振踊が餘程洒落てゐて面白いとか、云ふ様な、有りとあらゆる雑談が初まつてくる。

其所で折角雇はれた家庭の主人からも愛され、仕事も幾分か馴れ、學校の方も多少尻が落着いて、日常の仕事にも欠けぬ程、英語も饒舌れる様になつてゐて、氣に寛みが出て、生活に變化を望んでゐる所であるし、渡米の際に胴巻へ確かりと括りつけて来た、若干錢かもまだ残つてゐよう、と云ふのである。さあ、芝居を好きは劇場の木戸を潜つて見る。賭博は夢にも知らなかつたものが、何様ことをするものかと好奇心に驅られて、恐々暗い穴藏の底へ沈んで行つて見

る。冒險好きは、アラスカ行の帆船に乗り込んで、正札附の破戸漢と同じ毛布の中に包まつて寝ながら、月謝なしで罪惡の講義を聞かされると云ふ様な事になる。茲に於て我が同胞青年は、其の體質や、性癖や、嗜好や等の異なるに従つて、其の個人の色彩を發揮してくる様になり、黒かつたものが白くなることもあらうし、青いが赤になるのもあり、又は、黒は愈々黒く、白は愈々白くなるのもあつて、父兄や教師や、先輩や、知己や、の少ない、鞭撻拘束の羈絆を全く離れて、全で野伺の馬か牛の様に、行き度いまま、飛び刎ねたい儘に其の行動を自由にされるところから、種々異様な人物が形付くられて來やうと云ふのであるが、何しろ、中學を卒たか其所等の二十前後の青年である。誘惑には打勝ち難いのである。で、薄志弱行の徒が、その十の七八を占めて、意志堅固

に、邁往直進、成功を前途の希望として、萬艱を排除する底の傑物は何うも見出されぬ様であるが、何れにしても、日本にゐて、東京邊りの女義太夫の後を追つ驅けたり、花柳の巷に足を踏み込んで、父兄の送る學費を酒色の爲に使ひ果し、如何はしい海老茶式部の擒となつて、郷黨の笑ひ者になる様な、墮落學生とは、その意氣に於て聊か異つた點がある。其の行かんとするや、その進まんとするや、何れにしても、その進退の掛引に、活潑な男らしい氣象が燃てゐて、よしや賭博場の穴藏へ眞逆様に落ちて行くにしても、己れ、この一と勝負で乗るか反るか、一とつ我が身の運命を占つて見よう、うまく起きれば兼ての素志である、勞働團體を形成して、加州の鐵道事業を一手に引受け、能く商賣敵で邪魔の入る伊太利者や、希臘者に一と泡吹かせてやらうとか、云ふやうな

キビくしい考へが必らずある様に見受けられる。然し、其れも學僕時代から他の時代に推移りゆく、その期間の變化に伴ふ、心的作用であつて、其れが眞面目に永久彼れ等の男心を飾つてゐるのではなくして、其れから半年も經ち一年もすれば、矢張り、義太夫の尻を追ひ廻す連中と同型の墮落青年に成り下つて了ふものが、多數を占めてゐると云ふ證據には、米國の至る所に日本青年の居る所、殆んどこれと云つて目に立つ様な傑物俊才の顔を見ないのが誠に情なく感ずるのでも分る。

△リットル、ブラウン、メン

さらば、更に我が同胞青年の現況を繰り返さしめよ。紐育へ行くと、何所に日

本人があるのか、是所まで來ると東洋臭い風の匂いもしない様だが、扱、その巢と云ふ巢を探し當て見ると、成る程、居るわく、頭の眞つ黒な、脚の短かい、所謂「リットル、ブラウン、メン」がちよこく走り廻つてゐる。其等の本陣は、プロクリンの教會と、紐育の教會と、紐育青年會と、其から、數ある日本人旅館とで、其所には實に種々雑多な青年が流れ込んで來てゐるのであるが、多くは、西部、太平洋沿岸地を踏破して、——悪るく云へば食ひ詰めて、散々足掻きに足掻いた揚句を、此所に持ち來らしたのであるから、其れは随分、憂いも辛いも、嘗め盡し、失敗の有りたけや、不成功の少歴史の頁を年端も行かぬに、十分に繰り返して、そして、矢張り着のみ着の儘のサックコート一張羅、荷物と云つては、角々の摺り切れた、眞つ黒なスーツケースに汚ない襯衣

やカラーが哀れなこの人の過去を物語つてゐるのである。自分なども、朝夕是れ等の人々の中に起臥し飲食した事もあつて、互いに其の人生行路難を嘆き合つて雨の夜、風の夜には、頻りと故郷の兩親や朋友の事なども語り合ひ、泣きもし、笑ひもした事が屢々であつたが、實に此等青年日常生活を見ると、同情を表さずにはゐられぬ。

斯う云ふと、讀者は何の爲に然く同情の涙に咽ぶのか、學生は學生らしく品行を正し、學業に専心して、着々其の歩武を成功の域に近付けたらよからう、米國は勞働賃銀は高し、聞けば學問をするには種々好方便があると云ふのに、何を苦しんで自ら不幸を嘆じ不遇を悲しむのであるか、畢竟するにこれ自家の怠惰放逸の爲す所、敢て同情するに價しない、若し我々が渡米したならば必らず

是れ等の人々の如き轍を踏む様な、馬鹿氣た事はせぬと云ふであらうが、其れは岡目の八目だ、實際米國へ渡つて直接に米國生活をやつて見れば、實に其の同情に價すべき、或る事情が云ふに云はれぬ間に存在してゐると云ふ事を認めるのである。

何故、然うであるかと云ふに、紐育邊りで、相應な商店を持つてゐる、ビズ子スマンや、正金銀行なり、日本銀行なりの支店や、三井物産會社や、或は森村組などの様な大商店、又は領事館と云つた様な所に日本から派遣出張された、官吏や店員は知らぬこと、又は、華族の若殿とか、富豪の坊つちやんと云ふ様なものが、十分な學費を携へて、留學をしてゐるのならば知らぬこと、普通の青年と云ふ青年に、普通の學生と云ふ學生に、父兄から學資金などを送つて貰

つてゐるものは、一人もない、又、米國へ來て青年の花の時代に何等か一事業仕出來そう位の、考へを持つて來たものが、よしや父兄が送金を爲ると云つても、其れを好い氣で買いで貰ふ様な風の間人も少ない。自然に、自分で働いて自分で食つて行かうと云ふ氣概は、何時の間にか養はれて、兎に角獨立獨行の所謂米國氣質は吹き込まれてゐるのであつて、日本の學生か支關番を甘んじ、食客を以て満足してゐる様な腑甲斐ない根性の、染み込んでゐるのは譯が違ふ。だから、一般に人の氣が荒々しくなつて、負けじ氣性のみは酷く強くなつてくる。

△青年の稼ぎ振



紐育の青年が従事してゐる労働は、先づバトラ、クック、バレット、其れから夏場は、快遊船に乗り込んで、海上の生活をする。或は紐育から數哩を隔てた、コネー、アイランドと云ふ所に、夏の遊散場が立つのでこれは世界第一との評がある位、實に素晴らしく立派な仕掛のものである。其所へ日本品の雜貨店を出して、例の赤繪の具の安つばい九谷焼や、金ピカの安蒔繪や竹細工、提灯、繪端書、と云つたものを賣つてゐる。今一つ、これは十年前から著しく日本人の一時的金儲けとして、誰が發明したのか——發明と云ふ程の大仰なものではないが、『ジャパニース、ボーリングゲーム』と云つて、日本の球遊びと稱してゐるが、實は日本には其の様な玉遊戯はないので誰か小才の利いた人間が思ひ附いた事であらう——張物板位の幅の板に十ばかりの穴を淺く穿つ



て、其れに點數を附し、玉遊び者は其の穴を目掛けて、手許から、木製の小さな球を轉がし込むのであるが、玉はゴロ／＼と盤上を轉がつて、穴の周圍を轉がり廻るけれども、其所に多少の仕掛があつて、玉の落着くまでに一種の興味があるので、百の玉に入ると思つてゐると、形勢瞬間に轉じて三十の穴へ落ち込むので、御存じの單調な、お轉婆な變つた事好みの、ヤンキー、ガールは、キヤツ／＼云つて面白がつて、ワンゲーム、テンセンツで幾度も繰り返してゐて、五弗から十弗位まで遊ぶ呑氣者もある。何しろ盛り場の事であるから、存外金遣ひの荒いのが見榮坊半分に遣つて行くので、意外の收入があり、一日に二百弗から、三百弗も上る様な事がある。そしてワンゲーム毎に賞品があつて、安價いのは紙人形とか彌次郎兵衛だとか、起き上り小法師だとか云ふ様な、日

本固有の安玩弄物を貰つて、珍らしがつてほく／＼物で、掌の上で躍らして歸つて行く。高いのは、水金のいやらしい相馬焼の花瓶や、正成だの清正だの、ついた、何處焼か知らぬが恐ろしく下劣な焼き物の、いろ／＼のものを貰つて、東洋の美術品か何ぞの様に、オートモビルへ積み込んで、お歸り成さるお嬢さん方もある。

この仕事は、何でも客を引く商賣だから、若くつて、色の小白い、様子の好い、そして一寸軽く英語の話せる者でなくてはならぬ。店頭に立つて、玉を遊び度そうであるても、恥かんで手を出し兼ねてゐる奥さんへも、一寸軽い調子の英語で、奥様、一とつ如何です、ワンゲームがテンセンツ、皆んなお外しになつたところでこれこの彌次郎兵衛を差上げます。と人差指の上へ乗せて、黄色な聲

を出し例のオリエンタルスマイルと云ふ、特有の愛嬌を振り蒔くと、直ぐに一二弗は上らうと云ふ、極く愛嬌専門の商賣だから、これには學生が持つて來いだ。この商賣の店主は、學生でなくとも、雇人は悉く學生である。相應の給料が取れるから、一ト夏怠惰せずに働けば、來るべきタームの學費位には十分なのであるが、元來盛り場へ出入りをしてゐるので、それ相應の小遣錢も要る所から、矢張り左程の所得もないのである。但し學生自身が店主となつて一年間の學費位をこしらへたものは少くない。

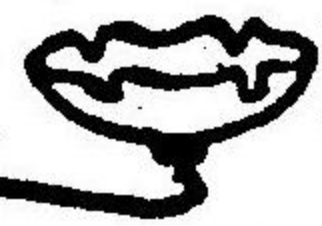
或る學生は大學生生活を學費不足から中途で止めて、風鈴製造をやつてゐた。長方形や、正方形に硝子を切り、それにペンキで雑な草花の繪を書き、金銀紙の短冊に百人一首の歌などを書いて張りつけ、それを線金の輪を色糸で結び合せ

たものに括りつけて、一寸とした風鈴をこしらへ、風の吹く軒につるすと、硝子が摩れあつて餘り好い音ではないが、チリン／＼鳴る音を價値にするのだ。此は一寸した思付きで可也の所得があつたと云ふことである。またこの風鈴製造を朋友の誰彼にさせて、一ダズン幾金とピースウオークにして仕拂ふので、遊んでゐるものは手内職にこれをやつてゐるのもあつた。

△家庭労働の種類

料理人となると、それは随分責任が重い。此所に一々料理人として、苦心及び心得を書き記したならば、多少興味があるものであらうが、くだ／＼しいから省略するとして、それは實に苦しい職業だ。一日ストーブの前に立つてゐるのだ

から、冬期は先づ好いとして、夏期の困難は非常である。玉なす汗を流してブレッドをこねたり、肉を焼いたり、アイスクリームをこしらへたり、ポテトやタイナツプの皮を剥いたり、一生懸命で主人の氣に入るやう、口に合ふやうと體裁風味に苦心慘澹してゐる所を見ると、氣の毒にならずにはゐられぬ。それも根からの料理人ならば、其れは商賣柄何んでもないが、一昨年の此頃までは早稻田の文科に居ましたの、明法を去年出ましたの、といふ人々が斯うして其の日を送つてゐるかと思ふと實に同情せざるを得ぬ。中には帝大の卒業生などもあり、現に斯く申す我輩なども散々此の仕事をやつたものであるが、イヤ、ハヤ、孫子の代までも此れだけはなすべきものではない。人間の根性が妙に曲つて、脳が變になり、僅かなことにビク／＼して酷い神経質になつて仕舞ふ。



それに我儘と街氣とで固まつた米國婦人を相手に一々残酷な批評をされて、此の肉の焼き方が不味とか此のデザートは砂糖澤山だとか、何にかにつけて叱言のないことはない。斯うして其の日々を餘計でもない給料で追ひ使はれて、それで悲觀せずに笑つてゐるものは、それこそ馬鹿でなければ非常な豪傑である。普通の人間は其難に堪えずして二ヶ月、三月で倒れて了ふのも、實に無理のない話である。ツアレットは紳士の扈從で、凡て紳士の身邊の要務をするのであるが、これも氣轉が好くて、英語が自由にあやつれねばならぬ。學生の職業中で、中々至難なものである。

バトラーは高等な家庭の給仕一切をやるのであるが、その氣苦勞の多いことは此所に一々述べるの暇がない。其の仕事の手際の見せ場はデナーパーティーの時



の食卓の飾り附け——例令ば食卓の周圍にメーデンヘア或はアスバラガスの綠葉を布きそれに取り合はして薔薇の花を程よく飾り、またセンターピースの上に乗つたヴェースには、時々の花を盛るといつたやうな一寸とした趣向で來客の喝采を博して、大に主人の賞讃を受けることなどもある。それから食事中の給仕の仕方の上手下手によつて來客の満足不満足は云はずもあれ、食前の合し酒を調合するに、例へばカクテルを作るとしてピターやホキスキーやチンやの分量手加減によつて、其出來際に斟酌せねばならず、サラダはバトラーの職務の中であるから、幾種もあるソースの造り様を一々十分知つてゐねばならぬので、僅かフォーク一つの掻き廻し加減で出來不來があるなどは云ふまでもないこと、食堂に塵一と筋落ちてゐても、直ぐに妻君の機嫌を損ずるといふ風

だから、始終萬事に抜目なく注意をしてゐなければならず、それに愛嬌も世辭も必要なり、人の機嫌氣づまを取つて、嫌と思つても『イエス、マダム、オートルイト、マダム』と氣輕に立ち働かねば、到底此の仕事が出来得るものではないのである。

△苦心慘憺の境涯

しかし、何事も習ふより馴れで一年二年と斯ういふ仕事を仕馴れてくると、凡ての調子合ひが分つて來るので、幾分か樂にはなるやうなものゝ、矢張り誰しも辛らいは同じことゝ見えて、一ケ年は愚か、半年と同じ家庭に働きを繼續する人は少ないやうである。

其他快遊船の働きにしる陸上の料理人、パトラーを海上でするのであるのだから、一層骨が折れるのである。太平洋の大波を乗り切つたもの、歐洲航路を帆船で有らゆる苦難を経て來たもの、それ等の青年が快遊船に乗り組むことは何んでもないやうではあるが、ロングアイランドの近海やオイスタベール附近の海は、とて瀬戸内海のやうなわけには行かぬ。大暴風の日にも出逢はしては、それこそ死ぬ思ひだと誰も同じことを云つてゐる所を見ると、矢張り苦勞は此所にもある。

斯ういふ風に何の仕事をした處で辛らくなないと云ふものはない。其所で自然に辛抱は續かなくなる。二月三月と働いて、其給料でまた三月四月を休養する。休養する間は教會になり、ボーテングハウスになり止宿して、暫時氣息休めを

するのであるから、其の時間を利用して學校へ行く迄には貯への金も盡きて無くなる、又候働く、又休む、斯うして同じ無趣味な生活を續けてゐる中に青年の花は散つて、いつしか頭に白髪も生えて来る。其所で故國は愈々懐かしく、歸朝の途に就きたいは山々だが、五年、十年の滞米に是といふ纏まつた學問はせず、金は出來ず、何を土産に親兄弟に顔が逢はせられやう、渡米當初の大志も煙の如く消えて、蹉跎たり易い人生を果敢なむより他はない。其所で自暴自棄になり、僅かな資本で支那賭博場に入出し、それが病みつきになつて恐ろしい墮落の淵に沈んで了ふのも少なくはあるまい。紐育の青年といふ青年に支那賭博場に足をふみこまぬものはない位なのは、皆此の自暴自棄から起つた結果である。

中には志の堅い青年もないではない、汗と膏で漸々幾程金をこしらへて、それを學資に紐育大學などへ這入つてゐるものもあり、又はビズチスカレヂなどの夜學部に通つてゐるものもある。プリンストン、エール、ハーバード、コロンビアといふやうな有名な大學へは勞働だけの給料で這入るのは至難のことである。それでも心掛の好い青年には、此の至難の業をやり遂げるものもないではない。

紐育を中心とした在留青年、其他諸州の日本人の少ない土地に生活してゐる青年の最も悲惨な境涯は、一朝病氣に取りつかれた時だ。太平洋沿岸の日本人の多い土地はさうでもないが、同胞を離れてあかの他人の中で貯金とてもなく病の床に臥したが最後、實にそれはみじめなもので目も當てられぬ。兩親の名

を呼んで故國の空を戀しがり、悶死した人も少なくない。一體斯ういふ風で、家庭の和樂と云ふことはなし、朋友はあつても世智辛らい浮世（米國へ行きさへすれば金の生る樹でも生えてゐて、唯金が取れるやうに思つてゐるのは大間違ひだ。世智辛らいことは日本も米國も同じこと、比較をしたら、米國の方が酷いかも分らぬ。これは實地に其の場を踏んだ人の染々感することだ。唯給金が高いといふことを以て直ちに生活が仕易いと早合點するのは愈々大間違ひである）だから、自分をサポートして行く丈けで十分だ。他人の身の上を案じてゐる暇は急がしい紐育などには殊に無いのである。其所で精神上の慰藉は無くなる。懷郷病と云ふやうなものになるものもあり、憂鬱病などになるものもある。或る青年は志業の遂げ難くして絶望の極、セントラル公

園でナイフで腹を切つて死んだ。また或男はナイアガラの瀑布に飛び込んで死んだ。農商務省の練習生で紐育大學へ入學中、世路の至難を苦に病んで喉を突き、死に切れずに送還されたものもある。此等は皆日常生活に慰藉のないと事志と違ひて、此の世を悲觀した結果から、一種の精神病者となるのである。紐育在留の青年の他に、中部、西部のいづれにも、頻々斯ういふ感むに堪へたる同胞青年の末路を見るのは、實に同情に堪へぬ譯である。

△在留青年の地方色

紐育の青年の多くは通學をしては居らぬ。それは彼等が通學すべく時間の餘裕と學費の資給が無い故でもあらうが、彼等の目に學校生活が困難であること

を厭ふよりは、學問では生活が出来ぬといふことを痛切に感じてゐる爲であるやうだ。此の感じを最も直接に證明する實例は、米國で學校生活をして大學を出て何々のデプロマを取つた所で、それが生活を助けることに格別の功をもなさず、米國人の商店で備つては呉れず、日本人の實業家も此等の學校出の人物を世事に迂遠なりとして使はぬ所から、却つて學事を棄て、貨殖の道一方に走るものもある。如何いふわけであるか、米國で學問をして學校生活をのみした青年に、さほどの人物を見ないのは不思議である。

太平洋沿岸の同胞青年は紐育の青年に比して青年らしい勇氣がある。何處にか奮闘の力瘤が出てゐる。紐育から桑港へ七年振りに歸つて來た自分はまるで別種の同胞青年を見るやうな氣がした。顔色は黒く服装は質素で丸々と頑

丈な身體は日本の書生と餘り異つた處を見ぬやうな容子の青年が、矢張り肩を怒らして歩いてゐる。さうで無くとも、何處か田舎じみて垢抜けがして居らぬ此れが紐育の同胞青年となると其れは随分氣取つてゐる。日本で云ふハイカラではないが、矢張り都會の氣風に染みて、時々の流行を逐ふと云ふ様な有様だから、一寸見ても小綺麗で意氣がたつた風采をしてゐるのである。風采は日本人の外國人に對して輕蔑の意味を薄くする外形上の手段とすれば、紐育の青年が比較的ニシャツ呼ばはりをせられぬのも風采が上つてゐると云ふ點にあるらしい。然し顔に紅粉や白粉を塗つたり、髪を解くに十分も十五分も費す様なのは餘り賞めた話ではない。けれ共、職業上風采を作らねば雇ひ主の意に叶はぬと云ふ所から、自然に斯う云ふ風俗に馴れて了ふ傾きがある。そして太平洋

沿岸と大西洋岸とは、おのづから青年の職業の種類が異つてゐて、西は荒い野良仕事、東は柔らかな室内の仕事で、貴婦人、令嬢を相手に綺麗事専門としてゐるから起つた現象であらう。

太平洋沿岸でも、桑港は殊に青年の多數を占めてゐて、其れ／＼青年の團體が形成されてゐる。就中最も知られたのは、バイン街の學生俱樂部で、これはハイスクールの學生の一團體である。會長は日本の官界で、一時才人として名を知られた、齋藤修一郎氏がやつてゐた。學生の中には秀才も少くはなからう、演説會や討論會や、假裝會や、素人演劇や、など中々振つてゐる。その他、基督教會に附屬した青年の團體が、四五もあるし、他に旅館や下宿屋などに陣取つて、未來の富豪を夢見たりしてゐる。何れにしても桑港及びローサンゼルス

一體の青年は、これから何か一と奮發やり出そう、ロツキーを越してシカゴにも行かう、ミスシスビーを渡つて紐育にも出ようと、其れ／＼に前途の希望を持つてゐる事であるから、よしや墮落に近い生涯を送つてゐても、一點光明の火を見れば、何等か成功の蔓に取絶らうと云ふ意氣が仄見えてゐる。誠に其の衷心や憫むべしである。

けれ共紐育の青年は、既に世酸を嘗め、失敗を重ね、旅に勞れ、學に倦み、業に飽きて、何所となく倦怠の色を現はして、「何うでもなれ／＼、日本へ歸つても日本の時勢には遅れる。米國に居ても思ふ様な事は出來ず」といふ風で、其の日其の日の風に雨に降られ打たれて、有耶無耶の間に歳月を費し骨休めのビール一杯、支那料理一碗、それで果敢ない半夜の夢に入ると云ふ形である。

紐育では學生らしい學生の氣風にも乏しい。文學を愛好すると云ふ程の青年も少ない。時折、同好二三俳句などを捻つてゐるのも見受けるが志を大陸の野に舒べて成功の曉に、凱歌を奏しよう底の意氣も既に早く消沈したかの有様である。太平洋岸となると、餘りに日本趣味を離れ過ぎぬ傾きがある。其れは多數の致す爲であらう。日本街もあり、日本料理屋もあり日本酒も飲めれば茶漬も食へる、三味線の音もする、正月になれば屠蘇に酔つてお目出度うなどと云つてる聲も聞えるし、日本字新聞は、桑港にだけでも三社あるし、其れくその紙上を飾つて、論説の小説の韻文のと大騒ぎをやつてゐるから、青年の中から、小説家も出よう、詩人も出よう、土地相應新聞相應の文豪が腕を揮つてゐるので、中々賑やかな事である、それ等をプレスノなり、リヴキングスト

ンの大和殖民地なり、パイセリアなり、フロリンなり、の農園のキャンプや、海岸の漁場で働きに従事してゐる青年は唯一の讀物としてゐるのである。一般に無趣味な無人境の労働に就くものは、何時か讀書の嗜好を持つて來るものである。で試みにキャンプ參觀をして見ると、垢によごれた枕の下にはいろいろの小説、雜誌類、講談物と、それは實に無量雑多で、『我輩は猫』の傍には『岩見重太郎』があり、自然派の作物と重なつて精神修養論と云つたやうなものもあり、随分それは奇觀である。そして互に作家評などを戦はしてゐる『書生キャンプ』なども屢々見受けるのである。太平洋岸では野外の労働が多いので、野外を好む青年は喜んで此の方へ働き口を求めが、鐵道労働などは最も骨の折れる仕事である。併し學生は力仕事に



適せぬ所から、葡萄摘、苺つみ、或はポテト一拾ひ、大根抜き等をやるのであるが、此れとて決して容易な業ではない。天日焼くが如き下に汗齋を出して働くのであるから、喉の乾きは實に夥しい。其所で自分の摘み取りつゝある葡萄や苺を多食して爲めに病の床につき、キャンプの薄暗い寢床に其儘永き眠りに就く憐れむべき青年も多いのである、畢竟何れの地、何れの國と雖も、安逸を貪ぼつて生活し得る天地は、今の此の二十世紀では無くなつてしまつたのである。

中には金坑や石炭坑などへ働く青年もある。青年學生の勞働としては餘りに激烈過ぎるであらう。深山へ這入つてチャップウッド(伐木業)をやつてゐるものもある。三冬雪森を埋むる時、海岸の深林に天を摩する如き老木を伐り倒せば、



雪は散り、海は鳴り、光景實に悽慘を極めた中に小屋掛けをして、焚火をしながら將來の希望を談じ合つたり、故國の戀人を夢みたりしてゐる青年もある。此等は實に詩的に出來た勞働の一つである。

左様かと思ふと、日本製の雜貨などを背負ふて戸毎に賣り歩く行商などをやつて桑港あたりから東都へ向つて進んで行くものもあり、所謂トランプといふ乞食旅行、汽車の飛び乗りをしながら旅から旅を行吟ふてテキサスあたりの野にカーツボーイの群に入つてゐるものもある。柔道の心得のあるものは二三の友人と謀り夏場の遊散場に小屋掛けをして、白人相手に奮闘する豪傑もあるが生兵法で大怪我をしたのが落位なことであらう。英語に熟練した青年は日本の武士道などを題にして、簡単な演説を試み相應の報酬を得てゐるものもあり、音樂に心

得のあるものは、ステージへ出てゐるものもある。併し、此れとて米國人の大喝采を博する迄に鍛錬したものは一人も無いらしい。中には英文を綴るに巧みなるものは、短詩や小品文などを雑誌新聞等に掲げて、多少の報酬を得ることもあるが、此れ將た文筆を以て世に立つまでには至らぬのである。以上述べた如き状態は、今の北米に生活しつつある我が青年學生の現況である。要するに此等の青年が幾何の歳月を経て後に獲收し得る所の効果は、其の個々各人の經營と苦心の上にあるので、今妄りに此れを是非するは、吾人の能く爲し能はざることである。但し此等幾千の我が同胞青年が其渡米當初の素志を貫き得て、所謂錦衣故郷に還るの日を期して待つと同時に吾人は在米同胞青年諸子の健康を祈るに切である。

筆の人から觀た實業團の渡米

“Serenely indifferent to fate,
Thou sittest at the Western Gate;
Thou seest the white tents fold their tents,
Oh, wanderer of to continents;
Thou drawest all things, small and great,
To thee, beside the Western Gate.”

(森殿にして運命に關せず、
西方の關門に汝は座して、
白浪の幕を望むか、汝、

嗟呼、兩大陸の擁護者よ、
西方關門の上、大と小と、
汝、萬有を收む。

是は米國近世の詩人ブレットハート氏が桑港市を謳歌した一節だ。

斯う詩的に歌つて來ると桑港は偉大なものになつて來る。所が例のキープリン
グ氏は、世界漫遊の途次此所へ來た。來ると其「アメリカン、ノート」の劈頭
第一に、此の詩を的にして手強い一矢を見舞つてゐる。曰く、

「予は過ぐる十四日間にて、詩人ハートは何か故に此の言をなせしかを怪し
む。抑も森嚴と稱する底のもの那邊にかある。將た運命に關せざる底の趣何
處にかある。偏へに保護を斯かる無謀の擁護者に信任したる兩大陸は禍なる

哉

斯う冷嘲を浴びせ掛て置いて、極めて露骨な筆鋒で悪罵の鐵槌を振り回した。

「予は洋上二十日の後、カリホルニヤの渦中に投せられ、一人の案内者もなく
獨り自己の結論をなさざる可らざる身となれり。若し此の記事の一度米人の眼
に觸れて、其怒を買は、予をして激せる衆庶の怒より脱せしめよ。洵に桑港
は狂人の巷にして、其大部分は實に完全なる瘋癲者の巢窟のみ、さはれ、唯、
取るべきものは夫れ婦人の美歟」

後の一句の愛嬌を減き去ると、此れで桑港は零になつてゐる。ハート氏の謳歌
の詩と、此の悪罵の文とを比較して見ると、其所に餘りに甚しい懸隔のあるの
に驚かすには居られぬ。無論其の間の消息は誰にでも分つてゐることだが、斯う

觀察が極端から極端に走つて來ると、同じ背景の前に立た此兩詩人の眼を疑ひたくなる。先月の十九日に日本から實業團の渡米と云ふことがあつた。此の日本の實業家の代表者等は所謂『西方の關門、兩大陸の擁護者』と云ふ金門灣頭に乗り込むであらう。そして『狂人の悲、完全なる癡癡者の巢窟』へ顔見世をする事だらうと思ふ。吾人は筆の人で、全く局外者だ。だが此れを日本の現代が現はした社會の事件として少なくとも多少の興味を以て觀る。そして私に此等の實業家が抱いた桑港に就いての感想を想像して、ハート派に屬するかキープリング系に加はるか云ふことを想像して見ると、どうしても苦勞の種にせずには居られなくなる。

實業家の諸大家は何れも無教育の人ではない。現代の思潮に觸てるか、ゐない

かは別問題として、學者も居る。雄辯家もゐる。教育家もあるやうだ。特に注意すべきは此の一行の中に今の日本の文壇に盛名を博してゐる文學者の加はつてゐることである。一行は正しく實業團の渡米に相違ないが、少し意味を更へると學者(或る程度迄の)團の渡米と云つても能くないかと思ふ。彼等の事業とする處は全然實業界の事に屬するは云ふまでもない。併し四圍の光景によつて彼等が得た感想は單に實業一點張のものではあるまいと思ふ。必ず其所には全く詩人化せぬまでも、幾分の詩的眼孔を以て觀察することであらうと思はれる。彼等が無教育でなくして、學者である限り——殊に一流の文學者も交つてゐる限り、——其の感想が乾燥無味ばかりでは終るまいと思ふ。彼等が那樣報告を後日に示すものか、彼等の偽りなき『アメリカン、ノート』が早く現は

れて来れば好いと俟ち遠いやうな氣がする。
 彼等は必ず自動車に乗せられて桑港市街を押し廻すことであらう。そして大宴
 會が開かれて盛んなトーストをやらかすことであらう。此の時の彼等の態度と
 意氣とは那樣ものであらう。キープリング氏一流の見識があつて、眼下に米人
 を瞰下す丈けの勇氣があるだらうか。キ氏が『乃公は英國人だぞ。』といふブラウ
 ドな自信があつたやうに、『俺等は日本人だぞ。』といふ自尊心を持続し得られる
 だらうか。お世辭上手の滑らかな舌に巻かれた上に、富の力に厭しつぶされは
 しまいか。金の光りに眼が眩みはしなからうか。個人の單純な觀光と譯が違
 ふ丈に、我々のやうな筆の人でさへ氣が氣でない。
 彼等の自動車は必ず一度は金門公園の大道を走るであらう。其所に獨逸の二詩

聖の銅像が偉觀を呈してゐる。若し此の下に車が停められた時、我が實業界の
 大立者等は那樣な感想を抱くだらうか。無感覺で通り抜けられるものであらう
 か。文學者の不朽の名が如何に絶大であるかといふことを些とばかり羨やまし
 くは思ふまいか。若し羨やましい氣が出るとすれば、必ず何處ぞ此の邊に大實
 業家の銅像が建つては居なからうかと探す氣になるだらう。若しあれば必ず彼
 等は其所に慰藉を見出すに決つてゐるが、生憎影も形も無つた時、彼等は一種
 不安心な状態にならずには居られまい。そして何か其死後に求めたいものがあ
 るやうな氣がするであらうと思ふ。
 斯う心的作用を起して来た時に、彼等の或者は文學の眞價と詩人の生命を知つ
 て来るに相違ない。そして崇拜の念を高めずには居られまい。

或者はまた一體誰が米國以外の産物であるこの二詩聖の像を、米國屈指の大公園の中に威張らして置くのだらうかと疑つて見て、それは此の加州に移住してゐる獨逸民族の實業家輩が故國の光榮として建てたものだと思つた時に、もはや文學と實業といふ事に就いて切實な感想を抱かすには居られまい。若し彼等の胸に、日本の實業家と日本の詩人小説家と、此の間に一個の問題が提出されないならば、彼等は到底普通以上の教育ある紳士とは認められまいかと思ふ。彼等は更に結束して、落機を越え、ミスシッピを亘り、そして紐育の大都に乗り込まねばならぬ。彼等がブロードウエーの街角に立つた時、銀座の光景を想ひ起すであらう。彼等は根底から市區改正案を提起せねばならぬなどと思ふかも知れぬ。ブロックリンの橋上に立つて、イースドリヴァーの波上自由の女

神像を雲の中に望んだ時に、吾妻橋の長さ、奈良の大佛の大きさを思ひ出すであらう。兩者を比較して、丁度米國の實業家と日本の實業家との長短大小の差を見出すと同じやうだなど、思ふかも知れない。ウォール街、ウキリアムス街の十字街頭に立つ時は、蠣殻町、兜町が見えて來て、此所に眼の碧い鈴久が鈴なりに押し合つてると可笑しくなるまいものでもない。ハート氏が自國の美を誇つたのは米國詩人の態度として立派である。キープリシグ氏が何處までも英國の精神を没却せずして、物質的文明の臭氣を一喝した意氣は其れ以上に懐かしいやうな氣がする。日本から海外に遊んだ詩人小説家も少くないが、他國の美から眩惑されて、自國の精神を消滅し掛つたやうな卑い態度を取つた人はないやうに思ふ。



這般の實業團體の一行も、必ず其所に擱んで居る團體の精神があることであらう。

實業團體の一行は吾人文學者以上の用意があることと思ふ。無闇と酔つた顔ばかりを横濱の埠頭に並べて來ねば國家の幸だと我々は切に思つてゐる。

北米世俗觀終

明治四十二年十二月十七日印刷
明治四十二年十二月二十日發行

（定價金三拾五錢）

| |
|-------|
| 北米世俗觀 |
| 著作權所有 |
| 奥付 |

著者 田村 松魚

發行者 大橋 新太郎

印刷者 市川 七作

東京市日本橋區本町三丁目八番地

東京市小石川區久堅町百八番地

發兌元

（振替貯金口座
東京二四〇番）

博文館

東京市日本橋區本町三丁目

印刷所 博文館印刷所

東京市小石川區久堅町百八番地

著君魚松村田

北米の花

全一册 菊列上製
表裝華麗 紙質精良
正金壹圓拾錢
小包料金八錢

著者は今の青年文士中一種の風骨を有す。年少氣鋭、未見の山河と未知の社會を研究し、別に其作風を起さんとするの概あり。三十六年北米の野に遊び、爾來六年間の長屋霜具さに米大陸の天地に放浪し、研鑽琢磨功を積んで後歸朝。今春東都の文壇に立つ此書は即ち著者が新らしき生涯と新らしき趣味とを世に公にせる一聲なりとす卷中收むる所の長短篇小説及隨筆數項は皆北米の花の美と其艷麗を競ふ

博文館發行

著君吉榮田鎌
記雜遊漫米歐

頁四十二百四數紙本美判六四册一全
錢六金稅郵 錢拾四金價正

永井荷風君著

あめりか物語

全一册 中判體裝
瀟西三色版口繪入
正金六拾五錢
郵稅金六錢

容内

- | | | |
|---------|---------|-----------|
| ○船室夜話 | ○蕪恨 | ○支那街の記 |
| ○野路のかへり | ○寢醒め | ○夜ある記 |
| ○岡の上 | ○夜の女 | ○六月の夜の夢 |
| ○醉美人 | ○一月一日 | ●附録 |
| ○長髮 | ○曉 | ○フランクスより |
| ○春と秋 | ○市俄古の二日 | ○船と車 |
| ○雪のやどり | ○夏の家 | ○ローン河のほとり |
| ○林間 | ○夜半の酒場 | |
| ○悪友 | ○落葉 | ○秋の巻 |

博文館發行

—(版三評好)—

著君羽乙橋大故

版三

歐米小觀

全一冊洋裝純布
紙數二百五十四頁
正價金四拾錢
郵税金六錢

容内

挿入 〇水彩画一頁 〇著者肖像コロタイプ刷 〇寫真版 歐米風景風俗三口繪 〇十四枚 〇漫画 乙羽作 不折畫十六枚 以上紙質頗精良印刷鮮明

〇歐米觀見 〇埃の維納 〇大日本帝國新 〇故伊藤桂介君
〇周航餘話 〇瑞西の山水 〇著作法に就て 〇大隈伯談片
〇巴里大博覽會 〇フタペスト 〇附録 〇大橋乙羽君
〇獅子丘 〇洋風の神と髮 〇書齋屋忠七 〇柳風鷗雨集
〇森の宮殿 〇西洋縮尾毛 〇朝日床 〇巴里萬國著作博覽會

賜天覽

▲續千山萬水

(廿二版)

全一冊袖珍上製 正價金五拾錢
無類の美本 小包料金八錢

賜天覽

▲續千山萬水

(十三版)

全一冊袖珍上製 正價金五拾錢
無類の美本 小包料金八錢

行發館文博

著君波小谷巖

波小洋行土產

版三

全二冊洋裝新形上製
寫真版挿入
正價一冊金壹圓廿錢
小包料一冊金八錢

巖谷小波君著

伯林戀の畫葉書

全一冊洋裝中版上製
紙數四百六十四頁
卷中寫真版數多挿入

正價金壹圓
小包料金八錢

上卷

〇波日記 〇伯林當座帳 〇伯林百談
〇歸朝日記

下卷

〇船中ゆれ 〇草 〇大陸鐵道がた栗毛
〇伯林まごつき毛 〇伯林見物記 〇白佛
來日記 〇伯林片信 〇續伯林片信 〇獨逸
の博覽會 〇大砲王の工場 〇倫敦の三日
〇記者學校 〇舞踏學校 〇伯林展氣賀 〇
獨逸の繪葉書 〇二年ぶり 〇夢に乙羽君
と語る外數項

行發館文博

文學士 大町桂月君著

(再版)

關東の山水

全一冊中版特製
紙數五百五十四頁
正價金壹圓
小包料金八錢

東京
博文館發行
本町

露を吸ひ霞を吹ひ飄々乎として行き悠々然として止まる高山の巔窮谷の底健脚到らぬ限もなく靈筆
縱横關八州の名所細大漏らさず文章山水渾然一致し高士紙表に躍動し雲煙机邊を掠繞し人をして遺
世超俗の思あらしむ洵にこれ大町桂月先生特得の文境加ふるに地圖あり數十葉の寫真あり中村不折
小杉未醜、丸山晚霞、高村真夫諸先生の挿畫あり皆當代の逸品錦上添花を添ふるの觀あらむ

大和田建樹君著

(四版)

散文野菊

正價金四拾五錢
郵税金六錢

神谷有終君編

東海道
旅の友

車窓の名勝觀

正價金四拾五錢 郵税金六錢

讀賣新聞記者
松川木公君著 (新版)

樺太探檢記

全一冊洋裝菊判美本
寫真版數葉挿入
正價金參拾八錢
郵税金六錢

押川春浪君著

(再版)

中村春吉無錢旅行

全一冊洋裝中判美本
寫真版數葉挿入
正價金參拾八錢
郵税金六錢

文學博士 姉崎正治君著

花つみ日記

好評
再版

全一冊洋裝中判上製
紙數六百頁
正價金壹圓參拾錢
小包料金八錢
南イタリヤの美國、北スコットの山地、野邊には草花を摘み、古寺に美術
の花を賞てし日記一篇、その中には湖畔の佛誕會に異國の友を會して、
佛教を語り、ロマの寺院に聖教會の生命活動を視察し、南歐に北歐にあ
らゆる種類の交友に接したる跡を傳ふ。天然美術の記録、宗教文明の評
論として江湖の一讀を薦む。

博文館發行

故鳥谷部銑太郎君著

春汀全集

故鳥谷部春汀氏の文品は世既に定評あり、殊に其人物月旦の技に至りては殆んど天下の絶品と稱せらる。今其浩漭なる遺文中、最も世上に喧傳したる人物月旦及び各種の評論を編輯し取敢へず三卷に分冊して治く江湖に薦む。

全三冊菊判特製
表装華麗美本
一冊金壹圓五拾錢
小包料金拾貳錢

第一卷 明治人物月旦 前編

政治家月旦

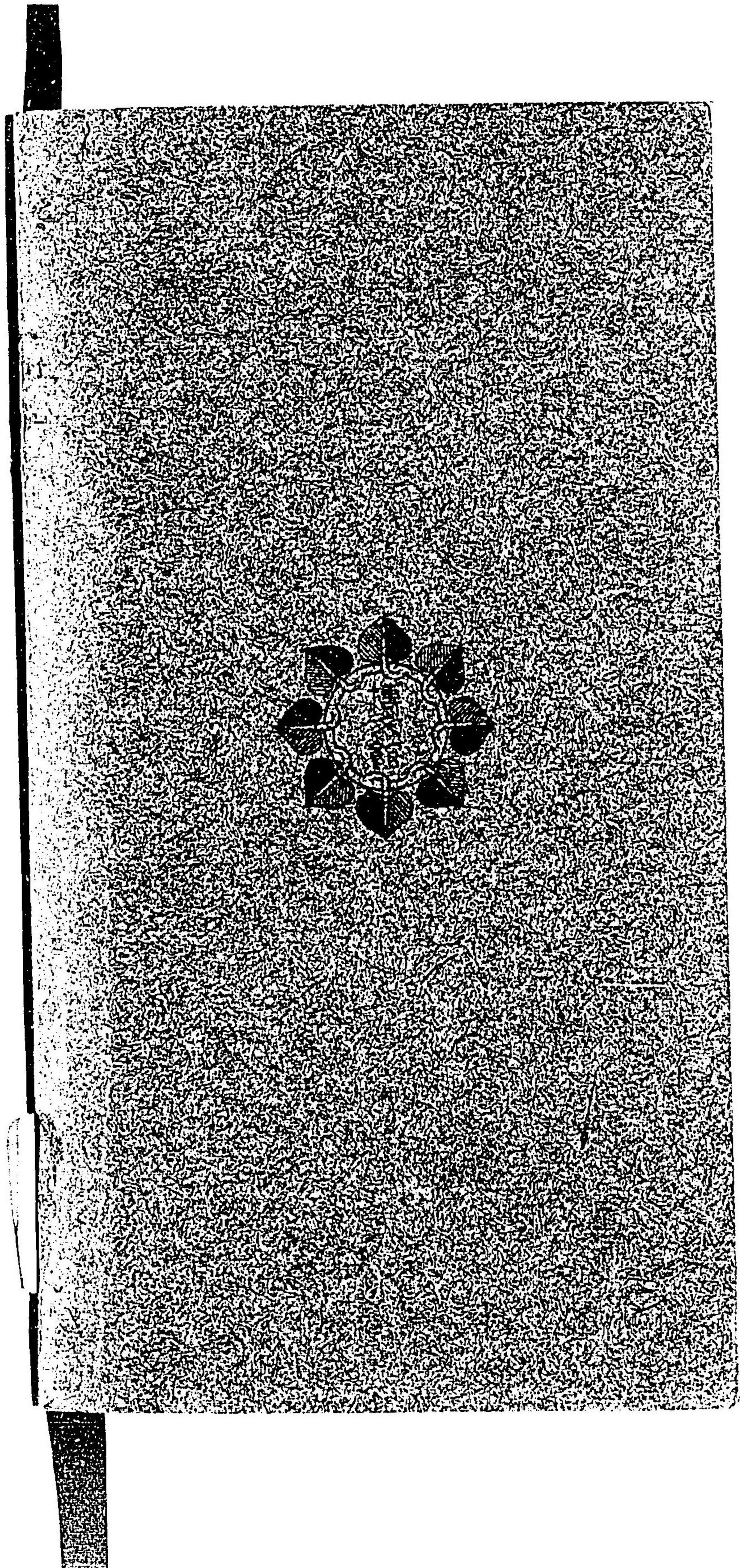
第二卷 明治人物月旦 後編

外交家月旦 軍人月旦
教育家月旦 實業家月旦
文士記者月旦

第三卷 各種の評論

外人月旦 其他

發兌元 東京本町 博文館



027405-000-4

特20-596

北米世俗観

田村 松魚/著

M42

ADJ-0182

